

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求（2012年度第3回研究会）

日時：2012年10月21日（日）13:00-19:00

場所：本郷サテライト7階

増田研（AA研共同研究員，長崎大学）

「南西部エチオピア：エチオピア研究における非エチオピア研究」

大川真由子（AA研共同研究員，東京外国語大学）

「フィールドからみえてくる地域的連関：中東・イスラーム地域研究における湾岸と東アフリカ」

飯高伸五（AA研共同研究員，高知県立大学）

「政治的構築物としてのミクロネシア地域民族誌の再検討」

丹羽典生（AA研共同研究員，国立民族学博物館）

「社会人類学の可能性に向けた覚え書き—オナリ神研究に着目した社会的境界への比較の視点」

<全体要旨>

今回は、エチオピア研究、中東湾岸地域研究、ミクロネシア研究、フィジー研究についてそれぞれ人類学研究史をふまえて、どのような地域概念が構築されているのか報告が行われた。エチオピアと中東湾岸地域の事例からは、(イ)日本と欧米の関係を含む研究者ネットワークを含む研究史と(ロ)国家を中心とした地域研究と異なるフィールドの現場から見えてくる地域構想力、連関性と孤立性の特質が議論された。ここから確認できたのは、人類学が地域「で」調査をすることで理論的展望とそれにかかわる新しい知見を獲得してきたことが確認できた。ミクロネシアの事例からは、ポリネシア・メラネシアとの違い、さらに日本植民地統治という歴史性が独自の問題群をつくっていることがわかった。最後に、フィジーの報告からは、地域社会へ移民した子孫がどのように当該社会で正当性を獲得するかについて婚姻制度と親族関係に関わる社会人類

学的分析が逆に現代のフィジーの地域的特質を明らかにできることが明示され大変刺激的な報告だった。

これらの報告をふまえて、あらためて確認できたのは、いずれの地域でも現代主流な研究としておこなわれている近現代史をふまえてポストコロニアルな分析方法以前には、それぞれの調査地での独自の問題の立てられ方がされていたことである。また現代の調査からも主流的な政治経済的な動態とは異なる地域連関性があり、それが独自の研究課題を構成していることであった。地域に焦点をあてる人類学研究が、歴史主義・植民地主義批判とは別な形で、研究の枠組みを作りつつあることを感じる研究会となった。

なお、今回は 2013 年 2 月 2 日に行うこととなった。

報告 1

南西部エチオピア：エチオピア研究における非エチオピア研究

増田研

南西部エチオピアにおける人類学的フィールドワークは 1960 年代から本格化した。200km 四方の中に多数の民族集団を抱えるこの地域では、その文化的多様性、近代化の浸透の遅さ、そして周辺地域をとりまく社会環境の特異さから、多くの研究者を惹きつけてきた。この地域は近代国家としてのエチオピアの一隅にあるが、初期には必ずしも「エチオピア研究」の中に位置づけられていたとはいえない。1980 年代後半からの中心/周辺パラダイムの登場から現在に至るまでの研究動向は、それを「エチオピア研究」の中に位置づけつつ、なおかつ「エチオピア」という枠組みを問い直す試みだったと言えよう。

報告 2

フィールドからみえてくる地域的連関：中東・イスラーム地域研究における湾岸と東アフリカ

大川真由子

アラビア半島あるいは湾岸地域は、砂漠が大部分を占める地理的状況および歴史的に政治的重要性が低かったことから、マシュリク（東アラブ諸国）やマグリブ（西アラブ諸国）といった他の中東地域との大陸的なつながりというよりは、むしろ海に開いたインドや東アフリカとのつながりが意識されていた。「インド洋海域世界」のように近代以前から人・モノ・情報の移動が常態化し

ていた「グローバル」な状況下における人の移動を描いた民族誌は特定の地域民族誌と呼びうるのか。自らの調査経験から、(帰還)移民/引揚者が地域的な枠組みをゆさぶる装置となりうることを示す。

報告 3

政治的構築物としてのミクロネシア地域民族誌の再検討

飯高伸五

19世紀末以降、複数の列強による統治を順次経験した赤道以北のミクロネシア地域では、宗主国の研究者によって、統治政策に対するローカルな反応の比較検討を通じて、地域性が描かれていった。同時に、同地域の社会文化的特徴を抽出しようとする人類学的研究の発達により、比較民族誌的な観点から地域性が構築されていった。一方で、近年の歴史学者による構築主義的アプローチや、ネイティブの研究者による地域史の研究では、同地域の地域性の本質化は慎重に回避され、政治的構築物としての特徴が強調されている。

報告 4

社会人類学の可能性に向けた覚え書き—オナリ神研究に着目した社会的境界への比較の視点

丹羽典生

オセアニアにおける地域研究の成果と人類学的な営為が交差する論点として、馬淵東一が提起したオナリ神の類比と対比はいまでも興味深い。本発表では、彼の提起した交叉イトコ婚の通文化的比較研究に着目して、その現代的意義を検討した。具体的には、フィジーの先住系と他民族との通婚関係の結果、交叉イトコとの関係が別の権利関係として再定義されている現象を紹介した。そしてグローバル化された社会において、こうした点に着目した類型的な地域横断的比較研究という視点の可能性について指摘した。